

# 教室から世界に笑顔を

所属	愛知県一宮市立奥小学校	実践者	鈴木 吾宙 (G)
対象	小学6年生	時間数	14時間
場所	教室	実践教科	総合的な学習の時間
ねらい	世界が抱える様々な問題を知り、それらの問題に対して自分たちに何ができるかを考え、行動する力を身に付ける。		
実践内容	回	プログラム	備考
	1・2	世界の国々を肯定的に捉える ○「 <u>世界を旅しよう</u> 」 様々な国の様子を写真や動画で紹介する。	・各国の写真、動画
	3～5	世界で起きている問題に出会う ○「 <u>無人島ゲーム</u> 」 自分たちの豊かな暮らしや、発展途上国とその地域の子どもの現状に気づく。 ○「 <u>世界がもし100人の村だったら</u> 」 世界の現実を参加型で体験し、人々が共生することの大切さに気づく。	・ワークショップ版「世界がもし100人の村だったら」
	6・7	ガーナについて知る ○「 <u>ガーナの良さを知ろう</u> 」 ガーナの良いところをインターネットで調べる。 ○「 <u>ガーナの課題を知ろう</u> 」 ガーナの課題をインターネットで調べる。	
	8	ガーナの課題に対して自分たちに何が出来るかを考える ○「 <u>貧困問題に対する取り組みについて考えよう</u> 」 ○「 <u>児童労働問題に対する取り組みについて考えよう</u> 」	・絵本「その子」
	9 ～ 14	ガーナの課題の解決を目指すために行動する ～6年2組スマイルプロジェクト ガーナの友達に笑顔を届けよう～ ○「 <u>日本の遊びを伝えよう</u> 」 折り紙、福笑いの説明書を手作りで作成し、研修時に届ける。 ○「 <u>製菓会社に手紙を送ろう</u> 」 日本のチョコレートを作る製菓会社に、カカオ農園における児童労働問題への社会的取り組みのお願いをする手紙を書く。	
成果	実際にガーナの友達に、自分たちで手作りした日本の遊び説明書を届けることができ、児童たちは大きな達成感を感じていた。		
課題	貧困問題や児童労働問題に着目して取り組んできたが、ガーナはアフリカで経済的に著しい発展を見せている国の一つである。そういったガーナの元気の良さも、もう少し上手に児童に伝えられれば良かった。		
備考	「製菓会社に手紙を送ろう」は、バレンタインデーの時期をうまく使い実施する予定。		

## [ 授業実践の詳細 ]

### 1 - 2 時限目 「世界を旅しよう！」

#### 1 子どもの活動の流れ

- ① 知っている国を書きだす。
- ② 行きたい国と、行って何がしたいのかを書きだす。
- ③ 様々な国の様子を写真や動画で視聴する。

#### 2 子どもの活動の成果・反応

◇ 日本では考えられないような文化を持つ国の様子などに、興味を持った様子であった。

#### 3 使用した教材

<教材1>担任作成のスライド(例:右写真)

#### この時限のねらい

- ・世界に興味を持つ。
- ・世界各国を肯定的に捉える。
- ・世界には、いろいろな言葉や文化、考え方を持った人がいることに気付く。



### 3 時限目 「無人島ゲーム」

#### 1 子どもの活動の流れ

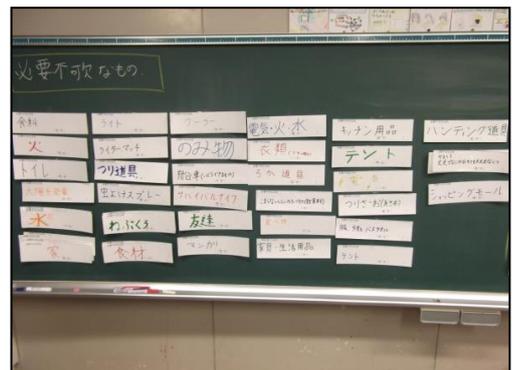
- ① 生活班に分かれる。
- ② 無人島に長期間くらすことになったとして、日本から持っていくもの 10 個を決める。初めに、持っていくものを個人でリストアップする。次に、班で持っていくものを 10 個にしぼる。
- ③ リストアップした 10 個を「必要不可欠なもの」と「あればいいもの」に分類する。
- ④ 黒板に、班でリストアップし分類したものを提示していく。
- ⑤ 「必要不可欠なもの」と「あればいいもの」を見比べ、「必要不可欠なもの」が生きるために欠かせないものであることに気づく。
- ⑥ 発展途上国とその地域の様子を写真で紹介し、生きるために欠かせない「必要不可欠なもの」ですら充分に手にすることができない人々がいることを知る。

#### 2 子どもの活動の成果・反応

◇ ゲームや携帯電話など普段自分たちが欲しがっているものの多くが「あればいいもの」であることに気がつく児童が多かった。また、水や食料など生きるために「必要不可欠なもの」が何不自由なく手に入っているという自分たちの生活環境に感謝しなければいけないという意見も

#### この時限のねらい

- ・何もない無人島に暮らすという条件で、何を持っていくか話し合い、深めることで、人間にとって本当に必要なものは何かに気づかせる。また、自分たちの豊かな暮らしや、発展途上国とその地域の子どもの現状に気づかせる



多く挙げた。

3 使用した教材 <教材2>担任が用意した発展途上国の写真

4・5 時限目「世界がもし100人の村だったら ～世界の富は誰が持っているの?」

1 子どもの活動の流れ

- ① 役割カードを一人一枚受け取る。
- ② 配られた役割カードをもとに、疑似体験をする。…役割カードの記号△(豊かな層)、□(中間の層)、○(貧困の層)に従ってグループに分かれる。その後、それぞれの層に、富の割合に見合ったお菓子を渡し、分けさせた。
- ③ 自分の層の立場での感想を発表する。
- ④ 発展途上国とその地域の様子の写真から、私たちがどれだけ豊かな生活をしているのか、そしてその裏側でどれだけ多くの人々が貧困で苦しんでいるのかを考える。

この時限のねらい

・世界全体の富の配分がどれほど不公平なものになっているかを体験する。世界の富の多くが、ほんのひと握りの先進国の人々によって占められており、わずかな富を発展途上国の人々で分け合っている現状を知る

2 子どもの活動の成果・反応

◇自分たち日本人が何不自由なく生活できていることに感謝しなければいけないという意見に加え、平等な世界を望む意見や自分たちに何かできることはないかという意見が挙げた。

3 使用した教材

<教材3>担任作成のスライド

<教材4>役割カード((特定非営利活動法人開発教育協会『ワークショップ版「世界がもし100人の村だったら」』)

世界の富は誰が持っているの?			
	記号	人口の割合	富の割合
豊かな人	△	20%	82.7%
中間の人	□	60%	15.9%
貧しい人	○	20%	1.4%

No.12  
役割カード ○

1. 性別: 女
2. 年齢: 大人
3. 日本の場合の年齢: 大人
4. 地域: アフリカ
5. 言語: スワヒリ語
6. あいさつの言葉: ジャンボ
7. 食べ物: バスノホス

この表記は「座ってください」という意味です。これを見せられたらその通りにしてください。このことは他の人には言わないでください。

6・7 時限目「ガーナの良さを知ろう」「ガーナの課題を知ろう」

1 子どもの活動の流れ

- ①インターネットでガーナの良さと課題について調べる。

2 子どもの活動の成果・反応

◇ガーナの位置、面積、人口、産業などの基本情報を知ることができた。また、盛んなスポーツがサッカーであったり、日本と異なる食文化について調べることができ、ガーナに興味を持つことができた。

この時限のねらい

・担任が教師海外研修でガーナに行くことに決まり、児童がガーナに興味関心を持てるようにする。

- ◇ 都市部と農村部の経済格差が大きく、農村部では未だに学校に行けない子どもが多くいることを調べることができた。また、学校に行けたとしても鉛筆やノートなどの筆記用具が揃えられなかったり、教科書すら買えなかったりする子どもたちがいることが分かった。ここでは、普段当たり前に学校に通えている自分たちの生活を振り返られる良い機会になった。当然のように学校に通えている、充分にごはんを食べられる、私たちの生活しているこの環境に感謝しなければいけないという子どもたちの意見が多く聞かれた。また、多くの児童が「募金や寄付をしたい。」と感想を口にするなど、実際に行動に移したいという気持ちが、発言に現れるようになってきた。
- ◇ 「ガーナの子どもはカカオの実をとるために働いているんだって。その中にはカカオの実がチョコレートになることを知らない子もいるんだって。」と一人の児童がパソコンの画面を見ながら発言した。その児童の一言がきっかけとなりカカオ農園における児童労働問題について詳しく取り扱った。普段何気なく口にしていてチョコレートの裏側に大きな問題が存在している。ガーナは、チョコレートの原料であるカカオ豆の生産が、国の産業を支えている。カカオ農園では多くの子どもたちが学校にも行けずに重労働を強いられて、子どもたちはそれに見合ったお金をもらうことができていないことや、農作業は、とても危険な作業になることを調べた。学習後の感想では「世の中が変わって欲しい。」「自分たちに何かできないか。」という主体的な意見が多く出るなど、児童の考えに変化が見られるようになった。

**3** 使用した教材 特になし

**8** 時限目「貧困問題に対する取り組みについて考えよう」  
「児童労働問題に対する取り組みについて考えよう」

**1** 子どもの活動の流れ

- ① ガーナの貧困問題に対し自分たちに何ができるか話し合う。
- ② 谷川俊太郎の詞「そのこ」を読み、ガーナのカカオ農園における児童労働問題に対して自分たちに何ができるか話し合う。

**この時限のねらい**

- ・何か行動すれば世界を動かすことができるという可能性を感じる。

**2** 子どもの活動の成果・反応

- ◇ この活動では、貧困問題への根本的な解決を目指すことは難しいので、児童たちの「ガーナの友達に笑顔を届けたい。」という視点を大切に、児童が取り組めることは何かを考えるさせた。担任が教師海外研修でガーナ農村部の小学校で授業を実施するにあたり、その機会を利用して6年2組から日本の遊びを紹介し、笑顔を届けることに決まった。紹介する日本の遊びは、「折り紙」と「福笑い」に決定した。これらの遊びを児童たちによって手作りの説明書にまとめ、児童の代わりに担任がガーナの小学校に持って行き、一緒に遊ぶというものとした。児童たちの、意欲に満ち溢れた顔が印象的だった。

- ◇ この問題への取り組みについては、ガーナのカカオ農園における児童労働問題を解決に向



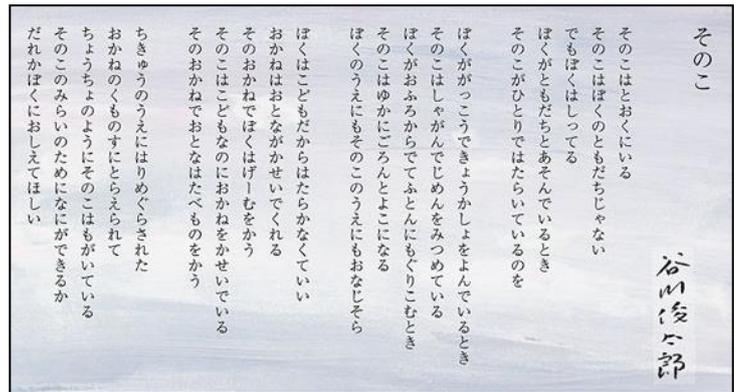
チョコレートの件ですが、工場(会社)のお客様相談室などに手紙を送るのはどうですか？

かわせる社会的取り組みをお願いする手紙を、日本のチョコレートを作る製菓会社に送ろうという話で進んだ。この案は、一人の児童の日記から出たものである。

### 3 使用した教材

<教材5>

谷川俊太郎 『そのこ』 2011、晶文社



## 9-11 時限目「日本の遊びを伝えよう」

### 1 子どもの活動の流れ

※ 学級で三つのグループに分かれ、折り紙(紙飛行機)・折り紙(紙風船)・福笑いの担当に分かれて作業を進めた。

- ① 折り紙(紙飛行機・紙風船)…紙飛行機と紙風船の折り方をB紙に写真付きの説明書にまとめた。また、ただ市販の折り紙を持って行くだけでは現地において持続できないという意見により、広告を折り紙のサイズに切って持って行くことにした。現地の学校では新聞はあると確認済みだったので、これで現地でも新聞を使うことで折り紙を自分たちで作ることができると、児童たちも喜んだ。
- ② 福笑い…実際に福笑いを色画用紙で作り、さらに遊び方を折り紙の場合と同じようにB紙に写真付きの説明書にまとめた。福笑いの遊びで使う目隠しについては、日本の文化の一つでもある手ぬぐいを持って行くことになった。完成後、児童たちに実際に遊んでもらうことで児童たち自身が日本の文化と触れ合える場にもなっていた

#### この時限のねらい

・ガーナを身近に感じ、世界の国々の人とつながっていることを感じさせる。



### 2 子どもの活動の成果・反応

◇担任の報告を受け、児童たちから「人を笑顔にすることで自分たちも笑顔になった。」「遠い国が身近に感じた。」「小さなことでも、37人集まれば大きな力になる。」という意見が挙がり、児童たちは達成感と自信に満ち溢れた表情をしていた。

### 3 使用した教材

特になし



## 12-14 時限目「製菓会社に手紙を送ろう」

### 1 子どもの活動の流れ

- ① 担任のガーナ帰国後にもう一度、児童労働問題についての話し合いをした。ここでは、企業にどういった内容で手紙を出すかを論点として話し合わせた。
- ② 事前に集めてあったチョコレート商品のパッケージから、それぞれの会社でカカオ生産国への貢献活動を行っていることを知る。
- ③ それをもとに、インターネットで各会社の社会貢献活動を調べる活動から始めた。
- ④ そして、調べた内容をもとに、各会社の取り組みのさらなる拡大を求める手紙を書く。

#### この時限のねらい

- ・自分たちで課題を見つけて行動するための力を身につける。

### 2 子どもの活動の成果・反応

- ◇ 各会社の取り組みを調べて、社会貢献活動に興味関心が持てるようになった。

### 3 使用した教材

<教材6>各製菓会社のホームページ      <教材7>チョコレートのパッケージ

## ■ 全体を通して

### 1 授業の様子

実践当初は自分たちの生活する環境に感謝する意見が出る中、日本人で良かったといった他人事のような感想を書く児童もいた。しかし、実践を重ねていくうちに、自分たちに何かできないかという意見が増えていった。さらに、実際に行動に移し、成功体験をすることで達成感や自信が児童たちのなかに生まれていったように思う。

### 2 参考文献・資料

- 1) 国際協力推進協会『開発教育・国際理解教育ハンドブック国際社会でも活躍できる日本人をめざして』2001